

農作物技術情報 第2号 花き

発行日 平成30年 4月26日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<http://i-agri.net/Index/gate002>」

- ◆ りんどう 株仕立て、土壌水分管理、雑草対策を適切に行いましょう。
- ◆ 小ぎく 育苗、定植作業を計画的に進めましょう。

りんどう

1 生育状況

露地栽培では、融雪の遅れによって昨年度より萌芽期が遅れた地域がありましたが、展葉期以降は全般に順調な生育となっています。

2 圃場管理

(1) 灌水

これから、圃場が乾燥しやすい時期となります。5、6月は特に草丈の伸長が旺盛な時期ですので、乾燥しないよう注意します。通路(うね間)灌水が基本となりますが、高温時の通路の滞水は、根に高温障害を及ぼす可能性があるため避けます。

(2) 株仕立て

株仕立ては、切花品質の確保や病害虫防除の点から重要な作業です。株当たり8~10本程度の茎を残して他は除去しますが、草勢に応じて加減します。作業が遅れないよう、茎の伸長の早い品種から順次開始し、草丈が30cm頃までに終わるようにします。

また、ウイルス病の伝染を防ぐため、刃物は使わずに手で折り取ります。間引いた茎葉は、病害虫予防のため、必ず圃場外へ持ち出して処分します。

(3) 追肥

春の基肥に追肥が必要な肥料(りんどう専用肥料等)を用いた場合は、以下のとおり追肥します。

ア 追肥時期

追肥時期は早晚性に併せて調節し、側芽が見える頃を目安に終わるようにします。

イ 追肥量

追肥には窒素・カリ成分が主体の速効性肥料を使用し、施肥量は窒素成分で5~8kg/10aを基準とします。速効性肥料なので2~3回に分けて施用しますが、例年より葉色が濃い場合は、1回の追肥量を減らすか追肥回数を減らします。

(4) 雑草対策

防草シートを積極的に活用し、手除草や機械除草をできるだけ減らします。シートは様々な種類がありますが、圃場の排水性を考慮して、できるだけ透水性の高いものを使用します。

また、りんどうに適用のある除草剤を、茎葉処理剤と土壌処理剤別に有効活用し、除草労力の軽減を図ります。

(5) 生理障害対策

葉先枯れ症状は、生育が盛んになる5月上旬頃から発生し、主に7月下旬頃まで見られます。原因は、急激な茎葉伸長に伴う植物体の水分不足と、植物体上部の石灰不足によるもの



葉先枯れ症状

とされています。よって、圃場を乾燥させない土壌水分管理が重要です。

また、生育初期からの定期的な石灰資材の葉面散布により、発生の軽減効果が期待できます。

3 病虫害防除

リンドウホソハマキの幼虫は、前年の残茎の中で越冬しますので、早めに除去して圃場外へ持ち出して処分します。

生育初期の防除で重要なのは、葉枯病とハダニ類です。いずれも、生育初期に多発すると、その後全体に拡大して防除に苦慮することになるので初期防除を徹底します。

特に、前年にハダニ類が発生した圃場では、残茎中などで越冬した成虫の数が多くなるため、本年も発生しやすい条件となります。葉裏をよく観察して発生状況を把握し、発生初期に薬剤防除を行います。ダニ剤は、同系薬剤は年1回の使用とし、葉裏にムラのないよう十分量を散布します。

4 施設栽培

促成・半促成栽培ともに、花芽分化期（側芽発生期が目安）までは最低気温8～10℃を目標に夜温を確保します。以降、最低気温が10℃を上回るようになったら、夜間入り口とサイドを徐々に開放し、茎の軟弱化を防ぎます。

日中の温度管理は25℃以下を目標とします。30℃を超えるような状況が続くと、露地の真夏と同じ状態になり、開花遅延の原因となるため、晴天時の換気には特に注意します。

病虫害では、リンドウホソハマキやハダニの発生時期になっています。圃場をよく観察し、発生初期に薬剤防除します。

5 育苗

りんどうは移植時の植え傷みの影響を受けやすいので、移植作業は遅くとも根がセル底に到達する前に終えます。ピンセットで苗を引き抜く際は、苗を傷を付けないよう優しく取り扱います。間引き・移植作業を終え、本葉が見え始めたら、液肥による追肥を開始します。苗の生育状態をよく観察し、適期に施用を始めます。

発芽が遅く、種皮が子葉から取れにくかった品種では、アルタナリア菌による苗腐敗症の発生が多くなります。本葉2対目が出始める時期に有効薬剤を散布して病気の拡大を防ぎます。

小ぎく

1 生育状況

冬期低温の影響で採穂用親株の生育が例年よりも緩慢であったため、一部で8月咲品種の挿し穂が不足する例が見られました。9月咲以降の品種では、挿し穂数は確保される見通しです。

2 育苗

育苗期間中は、15～20℃を目標に温度管理します。夜間はトンネルなどで保温しますが、日中は20℃を越えないよう施設やトンネルを開放して換気します。この時期は施設内の気温が急に高くなり、例年トンネルの開け忘れによる高温障害や、過度の遮光による発根の遅れがみられるので、管理には十分注意します。

なお、適切な条件で育苗した場合、挿し芽から定植適期苗となるまでの期間は概ね2週間です。

3 圃場準備

小ぎくは比較的根張りが浅いため、過湿による生育不良が発生しやすくなります。排水不良となりやすい水田転換畑等で栽培する場合は、明渠、暗渠等の排水対策を講じます。また、湿害を避けるため、高畦で栽培することも有効です。

4 定植

定植期は地域によって多少異なりますが、8月咲品種は4月下旬から5月上旬、9月咲品種は5月下旬から6月上旬が定植期となります。老化していない適期苗の定植が基本となりますが、定植直後に降霜が予想される場合は、天候が回復するまで定植を控えます。

定植作業は、極端な浅植えや深植えとならないようにし、植え込み後は苗が浮き上がらないよう軽く土で苗を押さえます。

定植後は、十分に灌水して活着や初期生育を促します。

5 定植後の管理

(1) 晩霜対策

5月中旬頃までは晩霜の心配があります。特に晩霜の多い地域では、ポリフィルムや不織布被覆による対策を行います。いずれも、風で飛ばされないようしっかりと固定します。

(2) 灌水

定植後に土壌の水分が不足すると、根の発育が抑えられて生育が停滞します。圃場が乾燥しないよう適宜灌水を行います。

(3) 摘心

摘心は、定植後に活着を確認してから芽の先端部を小さく摘み取ります。大きく摘心すると側枝の発生数が少なくなることがあります。作業後は圃場を何度か確認し、摘心漏れや不完全な摘心がないようにします。

なお、省力化を目的として、定植前にセルトレイ上で摘心するやり方もあります。ただし、側枝の発生が弱い品種では、定植後摘心とします。



(4) 土寄せ

無マルチ栽培では、側枝が10cm前後に伸びた頃と整枝後の2回、土寄せを実施します。

土寄せによって、新根の発生が促されて生育が旺盛となることから、切花のボリュームが確保されます。また、通路の雑草抑制にも有効です。

6 病虫害防除

白さび病は、親株から感染した苗を圃場に持ち込んで発生することが多いので、生育初期から予防散布を徹底します。有効薬剤のローテーション散布に努めます。

併せて、アブラムシ類やナモグリバエ等の害虫についても、初期防除に留意します。

春の農作業安全月間実施中！ [4月15日]

[~6月15日]

「農作業 こころのゆとりで 事故防止」

次号は5月31日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター・地域普及グループは、地域農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。